

「恐れるな。小さな群れよ。」

マルコによる福音書 10 章 13 - 16 節

森島 牧人 牧師

北から南へと進んで行く主イエスの宣教の旅は、ガリラヤ湖の北・カファルナウムを出てヨルダン川の向こう側のペレアに至っていました。旅も最終段階に入ったこの日、主イエスはいつものように教えを乞おうとやって来た多くの人々の悩みや疑問に答え、旧約聖書の教えであるモーセの律法の説き明かしをされていました。その最中、辺りが急に騒がしくなります。主イエスに触れていただこうと子供たちを連れた人々の集団が突如やって来て、聴衆を押しよせ主イエスに近づこうとしたのです。一縷の望みを抱いてやって来たそんな人々を制止したのは、主イエスの弟子たちでした。聖書には「弟子たちはこの人々を叱った。しかし、イエスはこれを見て憤り、弟子たちに言われた。『子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてならない。神の国はこのような者たちのものである。はっきり言っておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない』と。そして、子供たちを抱き上げ、手を置いて祝福された。」(マルコ 10 : 14 - 16) とあります。ここに出て来る「はっきり言っておく」は、神が宣言される時の定型語で、主は神の宣言として、子供たちを連れて来た人々を叱った弟子たちを戒められたのです。

今日の聖書の中心は、主イエスが、弟子たちの叱った子供たちを高々と抱き上げ手を置いて祝福し、そこに集まっていた多くの人々に、大切なことを教えようとしたことにあります。それを理解する前に、なぜ弟子たちは子供連れの人々を叱ったのか考えてみましょう。先ず、聴衆への配慮、すなわち主の御言葉を人々に確かに聞いてもらいたいという、弟子たちなりの宣教への思いがありました。そして何よりも彼らが気がかりだったのは、この地を出て再びヨルダン川を渡り、いよいよエルサレムに入るその時を前に、主に疲労が見えることでした。主をこれ以上疲れさせてはならないと、弟子たちは必死だったのでしょう。そんな自分たちに激しく憤られる主イエスを見て、彼らは驚き、訝ったに違いありません。

それでは主がなぜ憤られたのか、その答えは当時の社会背景にあります。ギリシャ・ローマ時代である当時、子供は非常に粗末に扱われていて、男の子でも第三子以降は家の名前も与えられず、捨て子も多かったのです。子供は神からの賜物とされていたユダヤの民の間でも、当時は同じようなことになっていました。そのような中で、主が子供を抱き上げ祝福して語られた「神の国はこのような者たちのものである」という教えは、革命的なものでした。常に人が踏みにじられ、軽んじられることに激しく怒られた主。その主の教えの近くに居ながら、子供を連れて来た人々を叱った弟子たちに、主はひどく腹を立てられたのでしょう。でも、主の感情を表すものとしてこの「憤る」が使われているのは、聖書の中でも、ここだけなのです。マルコ福音書は、この「憤る」とのこの言葉、その響きの中に、弟子たちを強く支配している罪をいかに激しく憎まれる主イエスの姿、神の愛をはっきりと見ているのではないのでしょうか。

だれが偉いかと議論する弟子たちに、子供を抱き上げ「わたしの名のためにこのような子供を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。」(同 9 : 37) と言われた主は、今日の聖書でも、されるがままの子供たちを、その無力さ故に祝福されています。私たちが無力な時こそ救いの御業はなされる、それは神ご自身がこの世に来られ、十字架に架かれたということ、私たちが罪の奴隷であった時に、すでに主イエスは私たちの罪を贖い、救いを成就されていたということの意味しています。自分の罪の前に決定的に無力な私たちが、神の前に、主イエスの前に自身を差し出すその時にこそ、主の十字架の言葉は、<神の力>なのであります。そして、今日の聖書は、その主イエスの救いは、今この教会の小さな群れにも与えられていると語っているのです。

(説教要約 羽入田悦子)